Dior, Christian

Talking about fashioin; Christian Dior as told to Élie Rabourdin and Alice Chavane.

New York, G.P. Putnam's, 1954.（文献番号９－５）

ディオール著

流行を語る；E.ラブールダン夫人とA.シャバンヌ夫人に語ったクリスチャン・ディオール

フランス・モード界の巨匠、クリスチャン・ディオールの自伝書。ディオールがどんな動機でファッション界に入り、どんな風に仕事に取り組み創作を生み出したか、その経歴をもとに、コレクション誕生までの経緯、デザイナーたちの言動、アトリエでの悲喜劇、気まぐれなマヌカンのこと、顧客への応待術など華々しい作品の陰で展開するフランス・オートクチュール界の独特な雰囲気などを彼自身が語っている。

ディオール（1905－1957）はフランスのノルマンディに生まれた。外交官を志し、パリの私立政治学校で研さんを積むが、建築、絵画に深い関心をもち、卒業後は画商となり、1928年には自らパリに画廊を経営した。1930年の経済恐慌で画商を断念、折から、〈フィガロ誌〉にデザイン画を描く機会に恵まれるが、このことがファッション界に第一歩を踏み出す契機となった。第二次大戦後、ルシアン・ルロンの下でデザイナーとして再びファッション界にもどり、ここでフランスの大資本家で繊維業者でもあるマルセル・ブサック氏に出合い、彼の後援で1946年に独立して自分の店を持った。翌年のコレクションでニュー・ルックを発表、一夜にして全世界をふうび（風靡）する第一線のデザイナーとなった。

このスタイルは、これまでの角ばった肩や短かくほっそりしたスカートという外型に対する反抗を示したもので、なだらかな肩線、たっぷりとしたスカートは市民に夢を抱かせ、歓迎された。以後、チューリップライン，Ｈライン，Ａラインと次々と独創的なシルエットを発表して流行界をリードした。彼は、芸術的才能と共に、優れた企業家としての手腕をもち、パリを中心にアメリカ、アジア、南アメリカなどに支店を設け、また、衣服以外にも帽子、宝石、手袋、ネクタイなどもデザインしている。1956年アローラインを発表してフランス政府よりレジョン・ドヌール勲章を授与されたが、1957年のスピンドルラインを最後に世を去った。

ディオールのデザインは常に新鮮で独創性に豊み、また卓越した技術をもち、時代の要請もあって新しい衣服の創造をもたらすと共にサンローラン、カルダンら、彼の後に続くデザイナーを育てた。

本書は、"Je suis couture"（フランス　コンキドール社刊 "Collection mon motire" シリーズとして1922年刊）の英訳本でアメリカから刊行されているが、類似書名のイギリス版と、仏語版からの和訳『私は流行を作る』（文献番号９－５－②）もある。